

「復興とは何か」を考える委員会について 議事録

- 日時：2009年5月30日 14:00～17:00
- 開催場所：関西学院大学 丸の内キャンパス
- 会の名称：「復興とは何か」を考える委員会
- 主催：関西学院大学災害復興制度研究所、日本災害復興学会
- 参加者：山中茂樹(関西学院大学復興制度研究所)、田中淳(東京大学)、稲垣文彦(中越防災安全推進機構・復興デザインセンター)、上村靖司(長岡技術科学大学)、近藤民代(神戸大学)、木村拓郎(社会安全研究所)、中林一樹(首都大学東京)、永松伸吾(人と防災未来センター)、渥美公秀(大阪大学)、魚住由紀(フリーアナウンサー)、青田良介(財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構学術交流本部大学連携事業課長)、石川永子(人と防災未来センター)、宮本匠(大阪大学大学院)
- 報告者：中林一樹(首都大学東京都市環境科学研究科教授・人と防災未来センター上級研究員)、木村拓郎(社会安全研究所)

○オリエンテーション

永松 まず、委員会のミッションを確認したい。「今後の議論の土台としての共通理解を形成する」ことであり、一つの定義にまとめることではない。主要な論点を整理し、今後の議論の発展に資すること。今年度だけで終了するものではないが、今年中に学会内部の主要な論客の報告をまとめるところまで行きたい。もちろん誰が主要な論客なのかという疑問はあるが。

報告フォーマットを用意した。「あるべき復興とは」を質問したうえで、その考えを形成した個人的背景についても明らかにしてもらいたい。復興についての考えは、その人の専門分野や、実際に経験したあるいは関わった災害などに大きな影響を受ける。論点を整理する際にそのような背景の理解が必要である。一人称で語る必要がある。ただし、一人称の主張だけだと議論にならないので、論理的な議論ももちろん必要である。それだけでなく、自分の主張の背景についても語ってほしいという意味に捉えてほしい。

次回(6月13日)は関西学院大学梅田キャンパスで予定通り開催する。

また、報告フォーマットの一般会員からの募集だが、すでに数件集まっている。その扱いについて、1月の学会大会の機会に報告してもらおうかと考えている。ただ、そうであれば募集はもう少し先でよいと考えている。

議事録は学会HPを通じて一般に公開する予定。

議論の三原則

なお、この委員会については、次の3原則に従って議論を行うことを提案したい。

第一の原則は「議論の勝敗を求めることはやめよう」である。この委員会は、多様な意見や考えを尊重し、理解し、相互に位置づけることをめざすものである。

第二の原則は「違和感は率直に口に出そう」である。議論に白黒つけないからといって、それは決して様々な主張を無批判に受け入れるということではない。わからない点や問題だと感じる点は率直に指摘し、論点を明確にしていきたい。

第三の原則は「わかりやすい言葉で議論しよう」である。この学会はかなりの程度現場を共有しているという点で他の学会とは違う。だが他方で、感覚的な表現で話を通じってしまうところもあり、ところが実は同じ表現で全く違う意味を込めているケースもある。例えば「軸ずらし」についても、引用の仕方は論者によって違う。議論のとっかかりとして感覚的な表現は便利であるが、この委員会の成果は、復興学会会員はもちろん、一般社会で理解され、受け入れられることを目指すものなので、最終的にはなるべくわかりやすい表現で議論することを目指したい。

○報告者：中林一樹

今日は地震からの復興を中心に話すことにする。

報告フォーマットの作成は、正直なところなかなか手ごわかった。自らの頭の中を整理する機会となった。「復興とは何か」という問いには、様々なレベルがある。今回の発表は日頃から復興について考えていることを集めてみた。

地震対策のサイクル

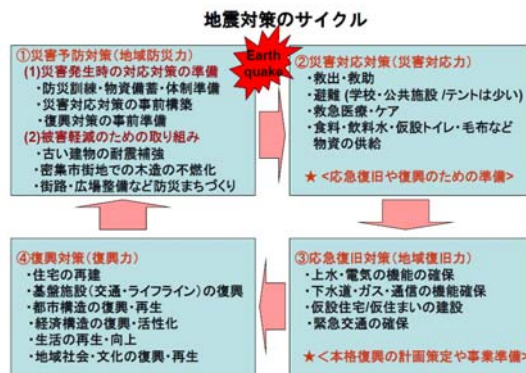
復興は、災害の3フェーズの最後の部分ととらえることができる。

災害対策のサイクルとは、被害を軽減するためのサイクルとも言える。被災地の間接被害を軽減させるために災害対策を行わないと、地域が衰退してしまう可能性がある。

「復興をゆっくりやるのか、早くやるのか」という議論がある。間接被害の軽減の面からは早くやるほうが良いのではないかと考える。

小さな災害では応急復旧の段階で終わることもある。復興を声高に言う場合は甚大災害のときで、それ以外の被害が小さい場合は個別復旧に矮小化されていく。

私が、復興について一番考えることは、「災害対応だけでなく。復興についても事前に考えておくべきだ」ということである。復興は次の災害への防災であるととらえるならば、復興計画についても事前のとりくみとして考えるべきだろう。



復旧・復興の議論と復興計画

復興の概念を考える機会となった大きな2つの災害がある。兵庫県南部地震は「創造的復興」、新潟県中越地震は「創造的復旧」がテーマとなった。両方とも「創造的」という言葉が使われているが、「復興」と「復旧」という違いがある。通常、原状回復（もとに戻す）が「復旧」、もとよりレベルの高いものにするのが「復興」ととらえられることが多い。そうであるならば、復興とはそもそも創造的であるべきということになる。

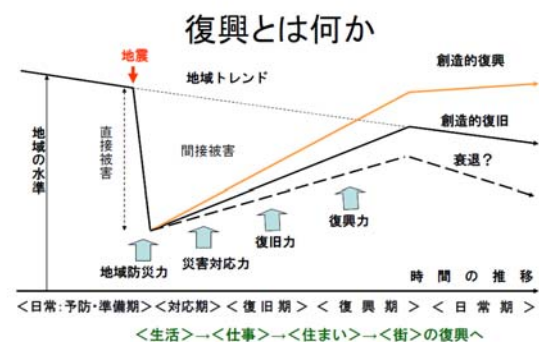
「創造的」とともに「フェニックス（福井地震）」日本人が好む復興にまつわる言葉である。私は、計画で定められた復興期間が過ぎて、外部からの支援が終了しても、地域が自律的に発展していけるのかが、「創造的」であるかどうか、を判断する要素だと認識している。

復興にかかる時間という意味では、どちらも復興計画は10年計画（阪神は5+5年、新潟3+3+4年）になっている。ちなみに、復興計画は任意策定であり、牧紀男先生の研究によると、復興計画は〇〇〇が8%を越えると策定する傾向があるとのことである。それ以下だと、復興事業に関する計画は、従前の総合計画に加える形となっているとのこと。よって、復興計画の位置付けはきちんとしているわけではなく、法的根拠はない。

復興計画を策定する目的にはいろいろなケースがある。現在、岩手の栗原市復興計画のアドバイザーをしているのだが、被害は比較的大きいわけではなく、甚大な被災を受けた地域も広くはない。しかし、市町村合併のため10町村の合併した後に発生した地震であり、従前の2村にあたる地域が被害が大きい。逆に言えば8町村被害少ない。そのため、合併市内の勢力としては2:8という昔の地割り構造がでてしまって、復興の足かせになってしまう懸念があった。そのため、内容としては、復興基金もなく若干さびしい内容ではあるが、わざと議会承認をしてやるべきと考えた。

復興と地域水準の推移

震災後、もとのトレンドまで戻れないと地域は衰退していく。創造的復興とは、震災前よりも地域水準をあげていく取り組みともいえる。また、復興事業期間は有限であるから、地震前に取り組んで災害後に復旧力、復興力となりえるような地域の体力をつけて



いくことが重要。

被災したあと、まず、すまいが再建できるか、最終的にはひとりひとりがサステナブルであるか、そして、その集合体の地域・まちがサステナブルであるかが復興の鍵となるだろう。

復興の3ステップと3要素

復興には3つのステップと内容がある。ステップ1：(基盤整備や住宅等の)空間の復興⇒ステップ2：(産業や経済等の)システマ的復興⇒ステップ3：(被災者の生活や地域社会の)人間的復興、というステップをふむ。これらの段階は重なるが、それは早くできる内容と時間がかかる内容があるからだ。このようなステップが本当にこれで良いのか確信があるわけではないので、議論が必要だが、ある種の順序は必要だと思う。

もちろん、ステップ1がステップ0ということもある。というのは、従前に建物やインフラがこわれなかった場合のことである。そうすると、普段の災害より2～3年早く次のステップにいくことができる。それを目指さなくてはいけないのだが、残念ながら木造密集市街地などステップ1が大きな意味をもつものになるだろう。日本型の復興は、ステップ1は逃れられないだろう。

復興対策の構成(復興の3要素)としては、復興のビジョン(どのような復興をするのか)、プランニング(どのように計画を策定するのか)、プロセス・マネジメント(どのように復興を実践するのか)があげられる。

創造的復興計画というのは、自治体にとって総合計画に等しいといえるが、災害後に復興計画をつくる義務はなく、自治法に基づくものではない。被災者被災社会と行政という2つの主役の関係性 役割分担でどのような相乗効果をつくりだしていくのか

災害復興の5つの基本理念

復興事業が終わったあと、地域がサステナブルに続いていくことを目的とした復興計画を考えるべきだ。

行政側から復興計画を考える <3Q>

行政側から復興を考えると、被害規模が重要。首都直下地震は、阪神・淡路大震災の8倍の規模と推定されている。というのも、行政が供給できるサービスの総体が同じ量であれば、量が増えれば質がさがると考えられるからだ。阪神・淡路大震災以降は、被害規模(量)が減少しているため、被災支援の質が上がっている復興がある。

災害復興の5つの基本的理念

- ① **連続復興**: 避難から復興までの連続性
→ 地域でまとまってみんなで復興を目指す
- ② **総合復興**: 復興まちづくり・村づくりは、「総合計画としての取り組み」→ 山間地の生業と生活の再生
- ③ **地域協働復興**: 「集落としての地域力」と「行政」との協働による、地域こたわり復興→被災者を流民化せず、地域/民族での取り組み
- ④ **複線復興**: 多様な復興ニーズに応える復興施策の多様化→復興基金(特別資金)による柔軟な取り組み

復興計画の3要素<3Q>

- **行政が考えねばならない3つの“Q”**
- **Quantity 規模** : 復興すべき被害規模
★ 牧(2007)によると全半壊建物率8%を超えると、自治体は復興計画を策定する。
- **Quality 質** : 復興すべき質(レベル)
★ 復興すべき質を誰が負担するのか。
公共施設は「現状復旧」を原則とするが、……
- **Quickness 速度** : 復興に要する時間
★ 迅速な復興が間接被害の軽減をもたらす。質と速度の調和点としての10年復興: 3+3+4, 5+5

しかし、今後想定される地震は規模の大きいものが多い。そのとき支援の質をどうするか。同じことは速度にもいえる。量と質を上げれば速度がさがるということだ。これらの関係をどう考えるのが重要だ。

被災者の視点で復興を考える <7P>

3Q と 7P をどうくみあわせていくかが大切。
P の復興が Q の復興に対抗できるのか=地域力

復興に不可欠な7つの視点<7P>

★ 被災者にとって、その次世代にとっての「復興」であるための「7つの“P”」

- ①方針（見通しがもてる）Perspective
- ②計画（目指す目標が分かる）Plan
- ③被災者（復興の主体は被災者）People (for, of, by)
- ④過程（復興の進め方）Process
- ⑤参加（市民・被災者の参加）Participation
- ⑥政策（復興の支援）Policy
- ⑦シンボル（復興の象徴）Project

★「地域力こそ、創造的復興の源泉」

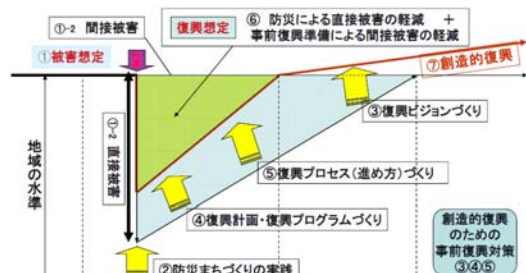
震災復興の事前準備

- (1) どのような復興を目指すのか
復興デザイン・計画論：復興目標像 東京都「震災復興グランドデザイン」
- (2) どのように復興計画を策定するのか
計画ガイドライン論：復興事業論 東京都「震災復興マニュアル（施策編）」
- (3) どのように復興を進めるか
復興プロセス論：復興実践論 東京都「震災復興マニュアル（プロセス編）」

復興想定

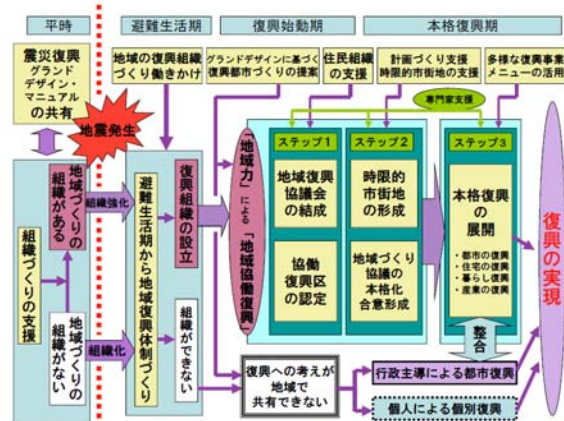
直接被害と間接被害をどのくらい減らせるか「復興想定」を考える。

復興後に上向きのトレンドができれば、創造的復興となるのでは？



東京都の事前復興のプロセス

地域がまとまり復興協議会等がつけられるところは専門家支援などを重点的に入れる。逆に、まとまりがないところは個別復興となる。ここ5～6年、私は東京都内の自治体の復興まちづくり訓練に、地域の市民の参加とともにとりくんでいる。



まとめ 復興の評価とは？

「被災地の地域特性」と「被災者の属性」に配慮する復興は、「多義的」に成らざるを得ない。「複線復興」の目指すところは、被災者一人ひとりの要望に対応できる「多様な復興」である。

しかし、地域としての復興は、地域ごとには「多義的」であるが、一つの地域においては「一義的」に成らざるを得ない。そこに「合意形成」の課題がある。

被災者一人ひとりの『多義的復興』と、被災地・社会の『一義的復興』はどのように調和できるか。制度設計で、「多義性」と「一義性」をどうつなげていくのか。この問題が復興を考えるときのポイントだと思う。ひとりひとりの満足解を集約しても地域の満足解になるわけではなく、そこを同考え調整していくのが、合意形成というプロセスの意味なのではないか。

永松 「復興とは？」という問いに、ストレートに返してくださったのに、非常に話がまとまっていて敬服している。ありがとうございます。都市計画分野での復興に関する考え方の傾向や、それらに触れるための重要人物や参考文献等があったら教えていただけないでしょうか。

小林 都市計画分野の専門家は、復興計画について、関東大震災以降とりくんでいて、復興研究の分野でも、他の研究者に比べて早くから考えていたのではないかと。

都市計画の専門家は、空間復興優先という傾向がある。「より安全により都市発展を」という考えがある。関東大震災からの復興である帝都復興計画では、後藤新平が尽力した。もしこの計画がなかったら、現在の東京都心を形成 区画整理、街路整備 空間整備型だが、現在のにぎわいをつくっていないだろう。災害復興という都市計画の機会をとらえて100年 200年先をとらえた都市づくりを考えるという視点がある。

越沢明氏の復興論もそういったところがある。東京大学の石川幹子氏の空間ネットワークも都市空間構造に力点を置いている。それに対して70年代以降、都市計画に関連してまちづくりを考えてきた専門家は、空間整備だけでなく、被災者のすまいや生活を、基盤整備に加えて考える流れがある。

<休憩>

○報告者：木村拓郎 社会安全研究所

現場レベルの復興に関わって20年近くになる。最初は91年の雲仙普賢岳の災害、その後、阪神・淡路大震災、有珠山、三宅島、中越、岩手・宮城と関わってきた。三宅島の復興には、もう発災から9年経つがまだ関わっている。三宅には高濃度地区があり、その土

地所有者で居住者が100世帯ある。行政の方もほっておくわけにいかないと、昨年から手をつけた。委員会を構成して、今後の対応を考えている。これは自分も仕事としてやっている。作業しつつ、私が委員会の委員長になっている。委員は、全部高濃度地区の住民だけ。いま対策を検討しているところ。三池地区の高濃度地区はほぼ対策の方向を決めた。直接住民と話をして、納得をしてもらったのが終わったところだ。

岩手・宮城については、避難指示が解除された。もちろん全部ではないが。これから本格復興。これを今後どう支援するかは考えているところ。復興にかかわりながら、いつも暗中模索、悶々としながら、手探り状態で進んできたので、復興とは何かはっきりしないまま日々考えてきた。

フォーマットをにらんで、何か書こうと思ったが、真面目に、優等生的な回答なら、総論を並べて、ありきたりの言葉を並べると70~80点くらいとれるだろうが、それは違う気がしたので、今までやってきたことからキーワードを並べたい。

あるべき復興には、3つぐらいあるのではないかと。ひとつは被災したエリアが安全になることが大前提だろう。安全なところに戻る。これは基本だと思う。その次の、二点目、三点目が、被災者目線で今まで関わってきたこともあり、そこで思うことを書いている。集約すると、被災者にとって、生活環境ができれば災害前に戻ればありがたいだろうということになる。住む場所についても、前住んでいた場所、あるいは近傍に再び住むことができるということ、集落であれば前住んでいた人たちと一緒に住めるということ、災害前にやっていたお祭りなど、食文化含めて、もろもろの生活環境が元に戻るということが二点目だ。三点目は、生活水準を取り戻すということ。そこで生活をするという意味では、仕事。年金生活者であっても、畑をやっていたりということがあって、仕事に戻れるということがある、それは生活が安定するということを意味している。それは結果的に精神的な安らぎへとつながっていくだろう。ベースとなる安全と、環境、生活水準、この3点を目指すことが復興の目標として大切なことではないかと思う。

その次に、私の復興観におけるキーワードだが、いろんな被災地を見た経験上、出てくるのはまず「住宅」だ。皆さん仰る。将来の地域づくり云々を言われても、「住宅」のことがかたづかないと。特に高齢者にとっては、住宅問題が今も頭が痛いところだ。高齢者の住宅再建は今も解決策が見つからないのではないかと思う。次に、「集落」。みなさんもとのメンバーで住みたいという気持ちは強いようだ。これは、先の住宅再建をからんでいるのだが、集落の再構築というのは結構難しい。集落という集団を形成しているメンバーから脱落してしまうこと、気持ちとしては一緒にいたいのに、住宅再建ができないために実質それができない人がいる。三つ目に、「生きがい」。これは、特に高齢の方。避難して前住んでいたところから離れて避難生活を送る、すると前住んでいた場所に戻りたい気持ちが出てくる。なぜかという、その人にとっては、前住んでいた場所で生活するのは生きがい。お金とかそういうのではなくて、自分はそこでしか生活できないという、個々人の価値観。これはそれぞれ異なり、なかなか目には見えないが、それが大切。この部分

は、なかなか行政の中では汲みとれないが。これからどう汲み入れるかが課題だろう。

四つ目は、「仕事・収入」。これは、体を使って何かやるということは、生きがいにもつながる話なので大切。からだを動かすこと、そこから農作物が生まれるということは、その人が生きていくという実感を生むもの。復興計画の中でも重要なファクターではないかと思う。雲仙の災害では、所有していた農地が全部なくなってしまった。住宅はできたが、農作業ができない。高齢者が一日中家にいる。結局からだをこわしてしまう。ああいう復興をどのように評価するかが問題。復興は、単に住宅だけではない。生きがいや健康などもっとマクロに見ないといけないと雲仙では感じた。五つ目は「再建資金」。支援法が改正され、だいぶつかいやすくなったが、栗原などをみても避難期間中の支援が制度的には皆無。自分のストックを食いつぶすしかない。結果的に再建しようと思った時に余力がなくなってしまう。復興は、避難生活中から連動しているということをもっと議論する必要があるように思う。ハード面から言えば、復旧復興とステップを踏むように思うが、個人でいえば、避難生活から復興が直接つながってくる。六つ目は、「文化」。祭りや錦鯉など、避難した人にとっては、故郷としてのよりどころになっている。被災者と話をしていると、「そろそろイワナの話だよね」、「山菜の話だよね」、こういうものが精神的な支えになっているように思う。こういったことを、目には見えないものだが、うまく生活復興につなげていけないかと思う。

次に、これらの復興観をもつに至った背景だが、これはここまで話した通り。高齢者の健康は血圧を測るだけではなく、そのひとが何を生きがいにしてきたのかという分析が不可欠ではないかと思う。そして、収入。金額の大小にかかわらず、収入の道を作っておくということが生きがいにつながってくるように思う。その次に、故郷である証の再生、さきほどの六つ目ではなしたような、その人のふるさと感を掘り起こして、それを復興計画に反映させるようなテクニック。計画策定の時にその辺に配慮することが必要ではないかと思う。

あとは質問があればそれにお応えしたい。

< 討論 >

永松 議論をやりはじめるときりがないので、今日は論点出しを出来れば良いと思っている。毎回違う報告者を招いても、その後は結局同じ議論を繰り返す可能性がある。ひとつひとつに深く入っていくのは今日は避けたいと思う。そして、次の会の報告者は、前の回までの議論の成果に、議論をつなぐわえていくような作業ができればと思う。

渥美 論点を出したい。中林先生の報告について。1点目は合意形成が課題だというのはその通りだと思うのだが、この研究会では合意形成とは何かまではっきり議論したいと思う。2点目は、迅速性という言葉をつかっていたが、端的に言ってどうして迅速である必要があるのか。だれにとって急ぐのかという点が気になった。3点目は、復興の主語が大切ではな

いか。誰が誰の生死をコントロールするのか。4点目は、東京の計画で、計画はそもそも必要なのか、やるなら東京を都であることをやめるといような大胆な計画はたてられないのか。5点目は、計画をもっと抽象的に論じることはできないのだろうか。今の場合は、野球でいうなら、打撃はどう、守備はどうという具体的な議論をされていると思うが、そういうことが計画なのだろうか。もう一つは木村さんの話について。「山菜の季節」など、「イワナの季節」など、これは中林先生の「空間の復興」に対して、「時間の復興」として位置づけられるのではないか。

木村 復興といった時に、いつがスタートで、いつが終わりなのかという論点がある。中越なんかは、住宅が壊れて直せばちょっと住めるといったように、応急修理の段階についても復興の範疇に入るような気もするが、時間、中身、どこから復興に入るのかという整理がついていないのではないか。

中林 これは復興の主語の問題とも関わっている。行政にとって、あるいは、Aさんにとって、Bさんにとって、「いつ始まって、いつ終わるのか」という問題である。主語によって時間の取り方は違う。被災者にとっては生涯復興ということもあるし、次世代に引き継がれるものもあるだろう。だが行政的には、事業の終わりがあるだろう。阪神は10年で区切りがつかず、13年ぐらいでようやく復興の文字が消えた。主語はとても大切だと思う。先程の、PとQというのも、主語によって全く異なると思ったから。多義的であるか、一義的であるかということも、主語の設定によって違ってくるといことだと思う。

時間の復興というのは、どういう概念か？

渥美 被災前に言葉にしないまでも感じていた季節の流れのこと。人々が被災前の季節感や被災前の時間の流れを再び取り戻した、という感覚や経験が大事なのでは。

田中 生活のリズムが戻るかということではないか。

木村さんは復興と大きく一つ概念を出された。だが中林先生は「復旧」と「復興」という言葉を分けて使われた。復興という言葉を出した時に、復旧とどのように違うのかということも考えておきたい。

中林 (先ほどの時間の概念について)復興がいつから始まるのか分からないのであれば、今から始まっていいのではないかと思ってる。以前は救出救助が終わってからだと考えられていたけど、現在はそうではないのでは。例えば、阪神・淡路の神戸では、私は3日目ぐらいからが復興だと思っていたが、職員は当日の夜ぐらいからだと言っていた。当日は茫然自失の時間なので復興ではないということだが。

山中 中林報告について「迅速な復興」とは、人なのか、モノなのか。

復旧の次に復興というステップの整理でいいのか。復旧とはモノをさしている、人々にとって復旧はない。

復興とは右肩あがりでないといけないのか。

そもそも復興という言葉をつかう必要があるのか、これが誤解を招くもとになっているのではないか。

復興と防災は相反してもいいのではないか。鳥取の日野町なら、住宅にまだブルーシートや新聞紙がつつこんであったりする、しかしコミュニティは息づいている。これは復興と呼んではいけないのか。私はこれを復興と呼びたい。

木村 復興の前提にはダメージがあると思うが、被害というものをどのように捉えるか。生計被災なんかを考えると、考える復興が変わってくるのではないか。復興を考えるための被害をもう一度議論する必要があるように思う。

中林 右肩あがりではないといけないのか、という問いについては、復興をだれが決めるのかということに関わってくる。

山中 復興計画をたてるのが官になっている。

中林 関東大震災以来、復興とはお上が使う言葉。「復興をやるのは行政、人々はそれに従う」というドグマをどのように否定するか。地域がどのようにやっていくのかを否定するわけではない。

山中 小千谷市は復旧と復興を位置づけた。

中林 計画論的にいうと、右肩あがりの計画しかつくったことなかった。今ようやく縮小の計画をたてるようになった。右肩下がりの計画であってもよい。今ようやく「スマートシュリンク（賢い縮小）」という考え方も出てきた。しかし、敗北ではない右肩下がりにしなければいけない。

山中 貝原前知事にインタビューをした。そのときに、創造的復興とは価値観の転換を指すと言っていた。被災を機にしたもっといいまちをつくる、そのいいまちとは何かという議論が足りていない。いろんな価値観で右肩あがりというのはいいが、軍事力の増強と経済発展による右肩あがりという呪縛から解放されなければならない。

中林 量と質の問題。高度経済成長はフォーディズムで量の問題だった。これからは質を

高めることが大切。しかし、このことは計画の中でなかなか書けない。だから、復興像。復興の中で何を指すのかということが大切だろう。

永松 折れ線グラフの、縦軸の地域の水準が何であるか、ということ。多義的だといいな
がら、縦軸を設定するのはミスリーディングではないか。

中林 ひとりひとりがこれをつかって考えることができるだろう。100人いれば、100のカーブがあってもいい。下がったけど上がらない人もいるかもしれない。

山中 そもそも評価を指標的にしないといけないのだろうか。引退した夫婦が、盆栽でもしながら暮らしている。経済は落ちているが、そんな幸せもあっていいのではないか。なんでもかんでも指標にしなければならない日本人の戦後の呪縛があるのではないか。

中林 ひとりひとりの復興を考えると、ひとりひとりの幸福感というものになっていく。家が壊れても落ち込まない人がいるかもしれない。それは尺度の作り方の問題。その人の主体的な価値観をはかる軸に置き換えられるのではないかと思う。ただ、社会学、心理学的に、主観的な尺度をつくるという研究が延々とされていると思うが。

田中 この議論を考えていく時に、ここでは「計画」という意味での復興と、個人の復興の関係が、議論の中でも混在している。これを分けておかなければならないのではないか。計画という意味での復興の必要性の議論ができれば、尺度は社会的に合意を得るために求められてしまう必要なものになるのではないか。

山中 ガバナンスにかかわる指標はつくることのできないのではないか。つくと経済的なものになってしまう。行政がつくる必要があるのはわかるが、やろうと思えば、事業者数などしかだせないでいる。ブータンの総幸福だって、結局指標をたてることのできない。

永松 これを収束する論点として、行政の計画がもっている意味は何かという論点があるとおもう。

渥美 質と量の関係についても議論すべきだ。行政はどうせ量しかできないのであれば、量だけやってもらおう。それに住民がリテラシーを持てばいいという考え方もできると思う。戦略的に、質と量の議論をすることもできるんじゃないか。

また、研究手法に関しても、質というとフィールドワークで、量と言えばアンケートということになっているのもどうか。その論点の上に行政の計画を考えるべきだと思う。

永松 中林先生の話で復興計画に法的根拠がないということを問題視されていたように思われる。ただ、そのほうがいいという見方もできるが。

中林 その点についてはいまだにわからない。復興計画は自由にやってもいいようにも思うが、政治家がからんだり、霞が関参りから、訳のわからない密室で莫大なお金が動いていくのは、あまり好ましくないのではないかとも思う。地方自治法の中で、震災の時の復興計画をきちんと位置付けする、きちんと責任もってやってもらう。それを変なネゴシエーションの世界ではなくて。そういう意味では法的に位置づけた方が良いでしょうにも思う。

上村 復興計画は誰に対する計画なのか。計画があるとないとで、国からのお金が変わるのか？

中林 変わらないと思う。自分たちの決意表明にすぎない。

上村 じゃあ、自分たちのために、自分たちの行動計画を立てているんですね。

中林 中越と栗原は全然違う。合併のために、持参金をもって、3か月で自分たちをどうするという絵をもって、合併に申し込んでいたのが中越。長岡市は、年が明けてみると、復興計画がいっぱいあった。それをまとめて、長岡市をどうするか、文言だけは合理化していった。でも、村として独立していた山古志が合併すると周縁の地だが、その計画によって、合併後もちいきの独自性を主張する根拠になった。逆に、栗原市は合併後だったから、違う意味合いがあった。復興計画を市議会を通すことでアピールする必要があった。

上村 乱暴に言えば、復旧計画だけあれば、復興ビジョンなくてもいいんじゃないか。

中林 10年先どうしたいというものがあれば、復興ビジョンなくてもいい。復旧計画だけあればいい。栗原は逆に、合併した後に地震が来ちゃったから、前なら自分たち独自の計画を立てることが出来たが、合併後だったので、ただでさえ忘れられそうな災害なのに、行政も市議会を通すということでアピールした。

上村 復旧計画と割り切れれば、エンジニアリングだから、計画は簡単に立てることができる。しかし、復興ビジョンということを考えると、栗原市でさえ、適正規模ではない。適正規模でないところでやろうとしても難しい。プランなどは、それぞれ目的があって、それがまざっちゃっていると難しい。木村さんの今日の話であれば、かなり復旧の話になるのではないかと思う。

田中 ビジョンとは何か。レベルがいくつかあるだろう。それを議論する手もあると思うが、それにこだわると、あまりに行政的な復興計画論に陥る危険があるように思う。上村先生の話から思ったのは、中林先生は復興のあるべき姿にこだわられた、自分なんかは概念にこだわりたいところもあるが、復興は一つの **activity** だから、目標があって何をという話だと思う。中林先生は **How** を強調、木村さんは **What**、その中身は何かという議論だったのではないか。そういう整理の仕方もあるのではないか。

永松 中林先生の中で印象的だったのは、「復興力」という言葉。「力」であるから、何かを行う能力のこと。やっぱり、**How** になっている。

中林 阪神に関わってきた中で、97年に都市復興マニュアルを作る時に、大きな対立になったのは、事前復興で議論になった、「何を復興するのか」と「どうやって復興するのか」のどちらかということ。「何を復興するのか」は、さきほどの復興の主語をどうするかではないが、いまの時代に住民主体ではない復興を考えることはできない。だから、**WHAT**ではなく、**HOW**のどうやってというマニュアルをつくった。地域の人たちが何を復興していきたいかというものを実現するためのプロセスを考えたい。

上村 復興について、未来を描くという感覚。都市のダイナミズムを考えた時に、次世代の多くは血のつながりがない。そのときに、あなたはどのような都市にしたいのかと問いかけるときの手法が、戦後や関東大震災後と異なるのではないか。いま地震があつて、50年後の想定がほとんど外国人だという想定もあり得る。中越だと、メンバーが入れ替わるというダイナミズムはないので、その人たちが幸せにという視点にならざるを得ない。これらは、分けて考えなければならないのだろうか。

中林 30年先ということを考えると、明日や3カ月後のことも分からない時代に先のことを考えられないというのはよくわかる。しかし、都市計画の中で、災害に関わらずに、10年後どうするかという計画づくりは公的にオーソライズされている。結局プランナーの力量が必要ということになる。

上村 そうであるなら、市民参加よりも有能な専門家に全部任せた方が良いということにもなる。

山中 **What** がないと、**How** もでてこないのではないか。そうでなければ、現行法制度に沿って粛々と事業をすることになりかねない。鳥取や豊岡は、台風23号の時、「コウノトリのすめる」、中越なら「山古志へ帰ろう」ということばがでてきた。ちいさいまちだから出来たのかもしれない。

中林 What の書かれた法律なんてどれだけあるのか？

山中 ほとんどないだろう。

中林 What は主人公がどのように変えようと思うかによって決まるものである。

山中 What をみつめることで、今の矛盾が見えてくるのではないか。その地域のそれぞれがかかえている脆弱性をあきらかにしていくのが、What を見つける作業ではないかと思う。

田中 何を復興していくのかという部分で、木村さんは居住地、集落、文化を取り戻すことを言っている。How や What にあたって、何に留意していくのかということはだせるのではないか。

上村 結局 5 W 1 H 全部分からない。

田中 who だって難しい。阪神でも、中国でも、被災者はだれかということは難しい。稲垣さんの被災地で感じるひとつの言葉で感じられた違和感なんかを明らかにしていくということしかできないのではないか。多義性を明確にしつつ、配慮すべきものは何かを明らかにすることが大切。

近藤 中林先生の報告について、主語が多義的になるのであれば、ステップはこの順番にならないのではないか。この順番をどのようにコーディネートするのが大切なのではないか。

魚住 住んでいる人たちへ問いかけて、いいまちづくりをというのは、同感だが難しい。新長田駅前のビルの開発、住民の人には聞いたが、意見が全然取りまとめられなかった、なぜなら、賃貸で住んでいる人がほとんどで、地域の住民がいなかったから。このように考えると、東京などではむずかしいのではないか。

山中 地主復興になってしまう部分がある。結局、神戸の長期計画が復興計画になっているのではないか。

青田 復興とは何か、復旧と復興の違い。災害の結果、露呈した社会的課題を解決することが復興になるのではないか。Reconsturction、再度構築するところが復旧と異なるのではないか。復興の意義を世界に向かって発信すべきだと思う。国連でも、大体

recovery になっている。四川でも、3年でできるところを2年でやるという、住宅ができれば復興完了。復興というのはもともとあった社会的な課題に触れていくところに意味があるのではないか。右肩上がりな課題であればそれが復興の課題になるし、質的な変換をもとめるのであれば、それが復興の課題になる。復興の多様性というものがあるのではないか。社会的課題の解決だから、行政の計画だけが復興ではない。

山中 海外では、recovery とは何を指しているのか？

青田 行政だけの概念ではないと思う。

田中 WTCとカトリナが大きい。あのあとから、アメリカの社会学者が復興の Well-being といいだした。

中林 原型復旧というが、ほんとうに原型復旧しているというのは分からない。山古志だってそう。実際には機能の原型復旧。

田中 原型とは何か。原型とは結局、計画のこと。未整備地帯には当然手は入らない。

青田 原型復旧が地域の課題を解決するのならばいいと思うのだが、そうでないから批判が出るのではないか。

稲垣 中林先生の8%こえたらという話が面白い。復興計画があるから復興を頑張ってるかというわけでもない。社会を生命体として捉えれば、危機的な状況になれば、生き残るために自然と回復していくという過程が生まれるのではないか。どういう社会的インパクトがあれば、質がどうという議論なしに、生き残ろうとするのだろうか。もうひとつ、平井先生がいいビジョンを作ったということ、われわれがどのように生きのころうとするかというのをあおったような部分がある。みんなが、心底持っているDNAを刺激したビジョンだったと思う。計画で分担していた役割ではない人が出てきたりしている部分もある。どれぐらいのインパクトがあれば社会がそんな風に動いて、どのようにうごいていくのか。生命体なんで絶対生き残るような気がする。

中林 中越の場合は、市町村合併という、生き残らなければならないという動機づけが余計にあったのではないかとも思う。

上村 さっき議論になっていた復興曲線が好き。やっぱり書きたい。復興をややこしくしているのは、復の文字ではないか。どこかに戻らなければならないという意味を足してい

る。縦軸の議論をすることがひとつの論点にするべきではないか。

永松 今日議論の根底には、復興というものをコントロールできるという前提。本当にそうなのか。われわれがなんといっても、コントロールできないような大きな流れがあるのではないか、それが復興の難しさを生んでいるのではないか。根本的にどうしようもないような。意志とは全く無関係の力で支配される力があるように思う。

中林 それは、復興とは関係なしにありえることではないか。人間を不死身にすることはできない、でも60で死ぬひとを80まで、ということはできる。それが、われわれのしごとではないのか。

リカバリーとリコンストラクションという議論があったが、日本人が考えるリコンストラクションというのは、基盤未整備のところに対して考えている。すでに住んでいる人がいて、基盤がある地域では完全にリカバリーではないか。災害待望ではなく、災害を迎え撃つ論。

青田 ニューオリンズみていると、日本人が考える復興なら、低所得者層や人種差別をどうするかということが含まれてくる。だが、あそこは観光が戻ってまちが空間的にもどるというのでよいというような意味合いがあるのでは。

中林 **restructure**、**reconstruction** は日本人の英語的に言うと、空間的なハードの話になるが、前者は社会構造の話ではある。翻訳の定番を作る必要があるかも。

山中 それは、法律的に分かる話なんではないか。そこにお金がつくかでわかる。